本当の幸せ

朝日がカーテンの隙間から差し込み、天地は目を覚ました。
「おはよっ。天地ぃ」
ベッドの上に漂っている魎呼がにこりと微笑んだ。
「また勝手に俺の部屋に入ってきて」
「布団に入ってないから良いだろう」
魎呼は天地の首に抱きつくと甘えた声を出した。
「ここんとこ毎日じゃないか」
「お前が目覚めてから、一番最初にお前の目に映りたいんだよ。あたしの顔を一番に見られて幸せだろ？天地ぃ」
（部屋で漂ってなくても…）
天地の頬に自分の頬を擦りつけている魎呼を横目で見ながら、天地は溜め息を吐いた。
「あのさ、俺、顔洗って着替えるから」
「うん。便所まで付いて行こうか？」
「来るな！」
天地に言われた魎呼は、ちぇっと舌を出した。
「絶対に付いて来るなよ」
再度、念を押す天地に、魎呼はハイハイと適当な相槌を打った。
（本当、魎呼って信用ならないよな）
魎呼の悪戯っ子の顔を思い浮かべながら、廊下に出ると、天地は洗面室へと向かった。

顔を洗い着替えた天地は、朝食の匂いに釣られ、居間に顔を出した。
（今日のお味噌汁の具は何かな）
台所から小気味良い包丁の音が聞こえてくる。
「おはよう、天地兄ちゃん」
忙しなく働いている砂沙美が、くるりと振り返り天地に挨拶をした。
「おはよう、砂沙美ちゃん。今日のお味噌汁はなんだい？」
「今日は天地兄ちゃんの好きなワカメのお味噌汁だよ」
砂沙美は笑顔で答えた。
「あ、でもまだ出来るまで時間が掛るから、一寸待ってね」
済まなそうに砂沙美が言うので、
「じゃあ、朝ご飯の前に俺、畑見て来るよ」
天地は畑に行くことにした。
玄関で靴を履いていると、今起きたばかりなのだろう、美星が目を擦りながら階段を下りて来た。

「おでかけですか？行ってらっしゃい」
寝ぼけた声の美星に、
「行って来ます美星さん」
天地は優しく返事をした。

畑はいつも通りだった。
（魎皇鬼のせいでニンジンが多いけど、他の野菜も育ってるな。よしよし）
天地はもしかして自分は農業の才能があるのかもしれないと、少し得意になった。
春が近付いてきたとはいえ、まだ朝の風は冷たい。天地は高く澄んだ青空を仰いだ。
（朝ご飯…出来たかな）
そう思った途端、腹が鳴る。
（砂沙美ちゃんのご飯、美味いもんな）
腹を擦りながら天地は思った。と、同時に穏やかな気持ちになった。
（皆が来てからどれくらいが経つのだろう）
いまではすっかりこの土地に馴染んでいる宇宙人の面々の顔を思い浮かべる。
（魎呼に起こされるのも、阿重霞さんが掃除してくれるのも、砂沙美ちゃんがご飯作ってくれるのも、美星さんが洗濯してくれるのも、鷲羽ちゃんが魎皇鬼の面倒見ているのも、もう日常の風景なんだな…）
知らずに天地は心が温かくなる。
（日常って良いよな…）
「おはよう天地」
「行ってらっしゃい天地さん」
魎呼と美星の顔がふと頭を過る。
（挨拶だって、親父と二人の時には、きちんとしなかったもんな）
少し前の出来事だったはずなのに、それは遠く昔の出来事の様に思えた。
（皆が居てくれて、俺、だからこそ、日常をおくれているんだな）
変わらない毎日に、感動し、感謝しているとまた腹が鳴った。
「今日も砂沙美ちゃんの手料理、沢山食べるか！」
天地は伸びをして、新鮮な朝の空気を胸一杯吸い込んだ。

帰宅すると阿重霞が天地を出迎えた。
「お帰りなさい、天地様」
笑顔で微笑む阿重霞に、天地は思った。
（こういうのが、幸せなんだろうな…。こういうのが、何よりの贅沢なんだ）
また心が温かくなる。
「お帰り天地ぃ。ん？何、阿重霞の顔を見てニヤけてるんだよ？」

何処かから現れた魎呼が天地に抱き付き、天地の顔を不思議そうに覗き込んだ。
（お帰りって良い言葉だよな。出迎えてくれる人が居るって事だもんな）
天地は嬉しくて破顔した。
「ただいま、阿重霞さん。魎呼」
幸せを噛み締めながら笑顔で言う天地に、魎呼と阿重霞は首を傾げた。
「天地兄ちゃん、皆、ご飯だよ！」
台所から砂沙美が顔を覗かせる。
「はーい」
靴を脱ぐと天地は家に上がった。いつもの柾木家の一日が始まる。